

## COMODO DESIGN IN HAKUBA

非日常のときめきと、日常のくつろぎ。

また白馬に帰って来たくるように



A

夏も冬も心地いい快適性と、内も外もカッコいいデザインを追求する、大八木建設「おおよぎさん家」の住まい。スキーをこよなく愛するオーナーの別荘兼保養所でもある白馬の家は、ワクワクするような非日常を楽しみつつ、住まいとしての快適性や機能性も大切に工夫に満ちたものでした。

オーナーの要望をすくい上げながら、自らも移住者だからこそ気づけたビルダー視点を大切に。またここに来たくなる家を取材しました。

No\_ **16**  
Original Report.  
大八木建設

スキーを愛するオーナーが、  
スキー仲間に依頼した家

緑濃い白馬の別荘地を進むと、石調サイディングのシックな建物が見えてきます。家の主は、大阪で会社を経営するNさん。スキー歴は小学生のころからだから、もう40年以上で、スキーを思い切り楽しむために、ここ白馬に別荘を構えました。いちばん近いゲレンデまでは、なんと車で5分。

「ニセコに志賀、野沢温泉……いろいろなところでスキーを楽しみましたが、白馬がいちばん好きで。シーズン券を買えば、10カ所のスキー場どこでも好きなところで滑れる。街もあって温泉もあって、僕はロードバイクにも乗るので、グリーンシーズンも楽しめる。大阪からの距離も車で5時間半と、通うのも決して遠くはないんですよ」

もともとこの土地には、Nさんの先輩が数人で所有する別荘がありました。老朽化したため手放すという話を耳にしたNさんは、自分がい取りたいと手を挙げ、解体して新たな家を建てることに。その新居を手がけたのが、白馬のお隣、大町市を拠点とする大八木建設です。

担当営業の中川紗知さんは、「夫とNさんが白馬でのスキー仲間です。『別荘を建てたいから、ぜひお願いしたい』と直々にお話をいただきました」と話します。実は中川さん自身も、関西からの移住組。白馬の自然の美しさと厳しさ、両方を知っているからこそその提案力で、Nさんの希望に合った家をとらにつくり上げました。



B

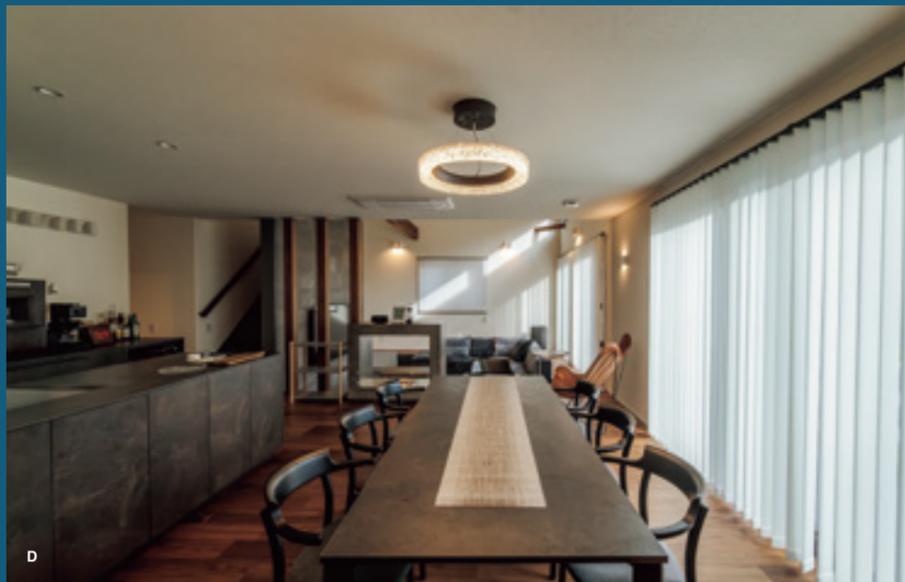


C

A\_スキーとロードバイクが趣味というオーナーNさん。玄関に入ってすぐ、スキー道具の乾燥室も。タイマー機能付きでそのまま大阪に帰れるのも気に入っている。  
B\_敷地は約500㎡、延べ床面積は約180㎡。駐車場は5台ほど確保した。外壁はメンテナンスフリーのサイディングを採用。窓からは、向かいの森のような緑が見える。 C\_大八木建設住宅事業部営業課長の中川紗知さん。Nさんとはスキーを通して知り合いに。



なるべく手をかけずに暮らせる  
別荘ならではの機能とデザイン



**D** 大きなダイニングテーブルでは、Nさんが仕事をしたり、役員会議を行うことも。会社とは違う環境で仕事することで、新しい発想が生まれることもあるという。 **E** ダイニングとリビングの間には暖炉を設置して間仕切りに。左のリビングは吹き抜けで開放的。 **F** 一段下がったダウンフロアのリビングは、奥様が希望したスタイル。グレーのシックな壁は、調湿機能に優れたエコカラット。 **G** ソファがいちばんくつろげる場所。 **H** 自炊も楽しんでいるNさん。得意料理はミネストローネ。会社のスタッフが集まるときは、鍋をふるまったり、たこ焼きパーティをしたり。 **I** キッチンワークトップや扉は「キッチンハウス」の欧州製樹脂素材エバルト。

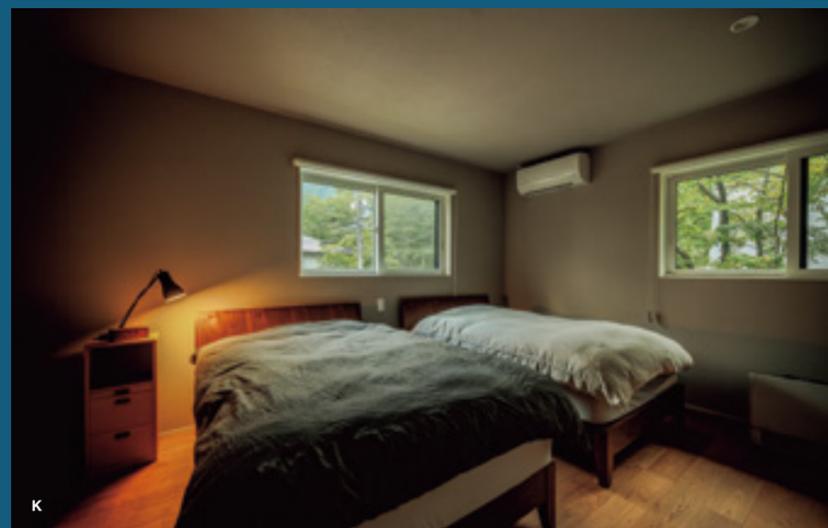
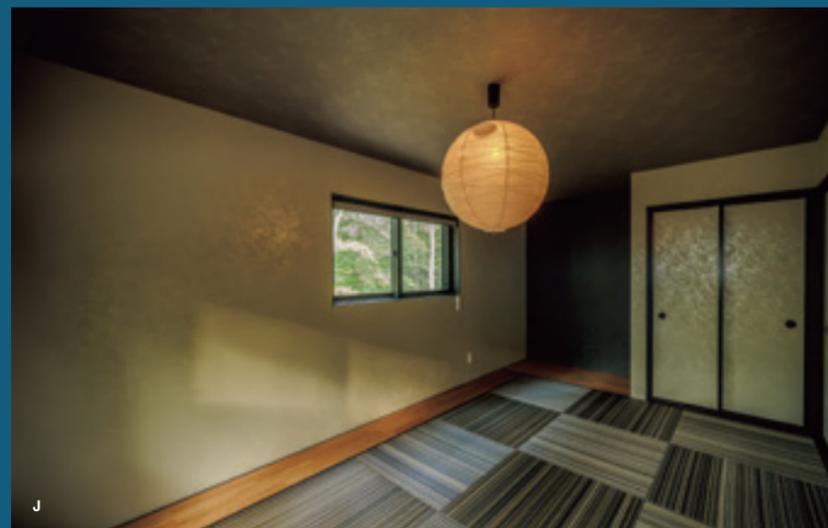
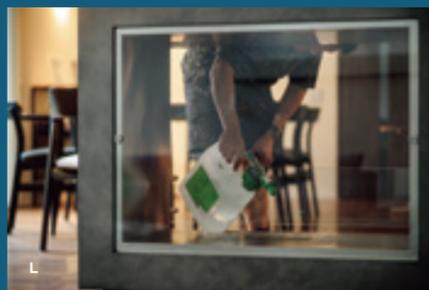
大八木建設の住宅事業部「おおよきさん家」による新築住宅のブランド〈COMODO DESIGN〉では、夏涼しくて冬暖かい「快適性」、そして内も外も美しい佇まいの「デザイン」を大切にしています。これに加えて、中川さんが掲げたN邸のコンセプトは「非日常が味わえる家」でした。

というのも、アクティブなNさんらしく、代表を務める会社にはスキー部や釣り部があるそうで、「せっかくだから僕ひとりじゃなくて、会社のスタッフにも使ってもらえるように、保養所も兼ねた家に入りたいと思ったのです」。これまで保養所は手がけたことがなかったという中川さんですが、大阪からわざわざやってくる会社のスタッフさんたちに、日常を忘れてリフレッシュしてほしいと考えました。

たとえば、リビングには天井高5m以上の吹き抜けを設け、すがすがしい開放感を。一段下がったダウンフロアで空間に変化をつけ、ソファだけでなく段差にも腰掛けてくつろげるように。冬は暖炉の炎がゆらめいて、気持ち落ち着かせてくれます。キッチン横のパントリーをはじめ、収納箇所を充実させることにより、

生活感を徹底的に感じさせない造り。また浴室のバスタブでは肩湯が楽しめる、シャワーブースは2階にも……。心踊るような非日常感と居心地のよさは、どこか山のリゾートヴィラにいるかのよう。

それだけで、数日単位とはいえないここで暮らし、一年を通して大阪と行き来するNさんにとっては、住まいとしての快適性や機能性も大切です。その一つが、メンテナンスのしやすさ。「日当たりのよい南側の窓は大きく取っていますが、湿気がたまりやすく手入れが大変な北側にはほぼ窓をつけていません。キッチンとダイニングの床材はウォルナットを表面に用いた挽板フローリングで、天然木のような風合いがありながら、無垢材と比べて手入れしやすい特長があります。また暖炉は、定期的な掃除が必要で薪の調達も大変な薪ストーブのかわりに、ラグジュアリーホテルでも採用されているバイオエタノール暖炉を提案しました」と中川さん。ルックスだけでなく、極力手をかけずに暮らせることに重点を置いたデザインは、留守の多い別荘だからこそ真価を発揮してくれるものでした。

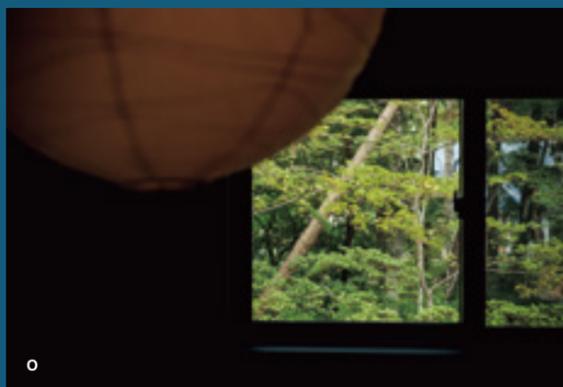
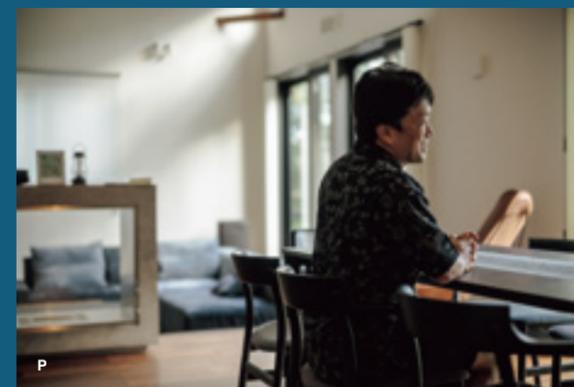


れたときも2階までほのかに暖かく、底冷えするようなこともありません。

「私も関西から移住してきたのでわかるのですが、マイナス10℃にもなる世界って、あまり経験したことがないと思うんです。そういう方にも、この家はいつでも暖かいし、快適だし、居心地いいなど実感してほしい。Nさんにも、ご家族にも、会社のスタッフさんにも、ああまた白馬に帰って来たいな、と思ってもらえるように」。それが、中川さんがこの家に込めた願いです。

ここには最大11人ものスタッフさんたちが宿泊したことがあり、なかには寝袋を持参して、あえてのころ寝を楽しむ人も。Nさんはというと、冬の間は月に10日ほど滞在し、愛するスキーを満喫する日々。白馬に来て変わったことといえば、大阪では妻まかせの家事を自らするようになったこと。「自炊に関しては、白馬の飲食店が混んでいるのと、お酒を楽しむのからという理由なのですが、キッチンが当初オブジェクくらいに考えていたのが、結構楽しんで使っています」。あと10年はしっかり働き、60代半ばを過ぎたら、冬の間は白馬に移住して、のんびり過ごしたいというNさん。この住まいは、Nさんの人生のご褒美なのかもしれません。

J\_2階にはスタッフが宿泊できる和室が2室。セキスイ壺「MIGUSA」を敷いてモダンな雰囲気。 K\_Nさん夫妻の寝室。妻が白馬を訪れるのは1シーズンに1回程度。大学生の息子が友人を連れて来ることも。



L・M\_暖炉はバイオエタノールを燃料とする「エコスマートファイヤー」。炎を見ているだけで心が癒されるよう。煙や煤が出ないため、煙突も換気設備も不要なのが大きなメリット。ただしこれだけでは暖気が足りないため、灯油の温水ルームヒーターやエアコンも併用している。 N\_雪深い地域だけに、基礎の高さは通常の倍に上げている。リビング前のデッキではBBQをしたり、昨冬は庭でかまくらづくりも楽しんだ。 O\_どの窓からもみずみずしい緑が見えて気持ちがいい。秋は家にいながらにして紅葉も眺められる。 P\_冬の間は大阪と白馬の二拠点生活を送っているNさん。食べものや水がおいしいのも白馬のいいところだと話す。移住者も多く、既にスキー仲間もたくさんできた。

寒さ厳しい白馬の住まい。  
高い断熱性でとことん快適に

白馬といえば、積雪が1.5〜2mになることも珍しくありません。移住して慣れない雪かきが大変という声も聞きますが、N邸があるのは別荘地。有料ですが「敷地内の雪かきは管理事務所にお願いできて助かっています」とNさん。「家の外にライブカメラを設置してあるので、白馬へ行く前に積雪をチェックして事前に依頼しておきます。そうであれば、到着して車も停められませんから」

同様に、住まいの寒さ対策も重要なポイントです。「断熱はいうまでもなく白馬仕様には窓はトリプルガラスで、外は耐久性に優れたアルミ、中は熱が伝わりにくい樹脂の複合サッシを採用しています」と中川さん。またNさんが大阪に帰る際も、冬なら2週間程度は、10℃に設定したエアコンをつけっぱなしにしておくのだとか。そうすると、次に訪